「顔美学」

見られる顔から見せる顔へ

押田 良機 著

医歯薬出版株式会社

2.「美」とは，何であろうか？

「美とは目と耳をよろこばせるもの」という有名な定義[1)]があるが，はたしてそれだけであろうか？　山河の美しさ，芸術の美しさ，人格の美……美はさまざまな位相をとって人間の前に立ち現れ，より高い価値へとひとを導く．では，ひとはいかにして「美」を発見し，どのようにこれを受け入れてきたのか．いろいろと疑問はつきない．これから「5. 社会美学」まで，「美」一般についての意味，意義，歴史，探求，認識などを考えてみる．

美学（aesthetics）は，ギリシャ語のaisthesis（感性・感覚・感情）に由来する用語で，理性的認識に対比する感情的認識の学としての美学を意味する．美や美学に関係する研究分野として（特に神経美学では），美の本質（美とは何か），美の基準（何が美しいのか），美の価値の理由（美は何のためにあるのか），美の認知過程（美はどのように感じられるか），そして美の表現と創造（美はどのように表現されるか），の5つに集約される．

いわゆる，「美の美学」（Aesthetics of Beauty）とか，「美の力学」（Dynamics of Beauty）の学問の根底にあるのは，簡単な一言，「美しいものには，力がある」[2)]．具体的に「美」を見ると，そこには，人の美，物の美そして心の美がある．

20世紀初頭に詩人で哲学的エッセイストであるカーリル・ギブランが「美は顔に宿しているのではなく，心の中の光である」と述べた[3,4)]．神から授かった知性や知識を磨くのは個人に与えられた責任であるはずだが，残念ながら多くの人はこれを怠っている．心を磨くと，おのずからその美が顔に出て，それも深みをもった美となるはずであるが，それに気がついていない人が多い．外見を気にする人は，そのぶん見えない所が脆くなる．つまり，心の美はまさしく個人の美意識と感覚に直接関

6. 顔と顔学

前章までで，美に関して諸々の考察をしてきた．この幅が広く奥が深いたった一言，「美」を，見出したりあるいは創造するキャンバスでもある「顔」について，ここから「9. 顔の情報とコミュニケーション」までで考察する．

人の数だけの顔がある．すなわちすべての人はそれぞれの顔をもち，すべての顔はほかのすべての顔と異なっている．しかも人は決して自分の顔を見ることはできない．したがって，人が顔をもつのではなく，顔が人なのである．なぜなら，顔はモノではない，モノならばもつこともでき，見ることもできる．しかし人は顔をもつことも見ることもできない[1)]．顔は他人に見られることによって生きているのであり，他人の顔は私が見ることで活きてくる[2)]．

今，顔はモノではないと言った．しかし，テレビなどでは画面には顔だらけである．しかも，その顔はじろじろと眺めることのできるモノとしての顔にすぎず，本当の顔はそれほどじっと見られるモノではない．通常の人間は視線が合うと，本能的に目をそらす．そのようなモノが顔である．ところが，テレビで大写しされる顔は，そうではない．胃が健康であり普通に機能しているときは，胃の存在すら忘れるくらい胃のことを誰も考えない．同じことが顔についても言えるのではないか．

顔は単に人間の本質を意味しているのではなく，まさに，人間の本質が顔に現れ，他人の顔と合わされ，つながり，触れ合い，他人のなかに出され，他人に見られる．すべての衣装は顔と調和し，顔を引き立たせるようにデザインされている．裸の全身を鏡に写すと，陽に灼けた顔あるいは化粧のあとの見える顔から下半身が頼りなげに遊離し，行きどころを失い，困惑し，狼狽し，顔との結びつきを回復するために衣装を求めているのが認められる[1)]．

9. 顔の情報とコミュニケーション

「人には，自分が他人から見られていることを意識して，はじめて自分の行動をなしうることがある」と，発達心理学者は述べている[1]．他人の顔は自分が見ることで活きてくるので，自分の顔は他人に見られることによって活きている[2]．「人は見かけで判断してはならない」という警句がある通り，われわれは他者に関する情報の多くを外見から得ている．とりわけ顔は大きな情報源となっている．人種，年齢，性別，所属階層といった人口統計学的な属性ばかりでなく，健康状態や相手が今感じている感情，さらに個性・特性のような内面的属性まで顔から読もうとしている．

感情は主に顔に現れ，身体には示されない．身体はその代わりに，人々がどのように感情を処理しているかを示す．顔は年齢，性別，魅力，親和性，感情など，生活を営むうえで必要なさまざまな情報をもつ．顔は感情を表す主たる信号システムであり，しかも多重信号，多重通信システムとしての顔である．

顔は，3つのタイプの信号を提供する[3]．すなわち，静的な信号には，多少とも永久的な顔の諸相を含んでおり，皮膚の色，顔型，骨格，脂肪質の沈殿量，顔の目鼻立ち（眉，眼，鼻，口）の大きさ，形，位置がそれである．ゆっくりした信号には，時間とともに徐々に生ずる顔貌の変化，皮膚組織や皮膚の色素の変化も含まれ，特に熟年期にそれが目立つ．素早い信号は，顔の筋肉の動きで生み出される結果，顔貌が一時的に変化し，顔の目鼻立ちの位置や形が変わり，一時的な皺ができる．このような変化は，数秒間程度の速さで顔にあらわれては消える．

相手の顔を見ないでコミュニケーションができるようになった（いわば匿顔の）現在，あきらかに顔が社会のなかでもつ地位は低下している[2]とはいえ，顔は個人的な特徴や社会的脈絡や社会についての社会

10. 美術解剖学と顔パーツの役目

人体を研究対象とし，解剖学を主な情報源とした応用解剖学の一つである美術解剖学は，顔の表情などを扱うことを特徴とする．そのため，人種差，性差，年齢差のように人類学や生物学，また発生学的な情報も含まれる．

美術解剖学は，生体の体表観察では的確に捉えることが難しい体表面の起伏や構造を，解剖学的に認識することで捉えやすくする狙いがある[1)]．その目的から，人体の機構，形態，骨格や筋肉などが主な研究対象となる．美しい顔の形の起源，その美的効果とその活用と表現法など，われわれが無関心ではいられない顔の美と醜について，人は誰でも時代を越えて関心を寄せてきた．

西田[2)]は顔の形の美しさを，美術解剖学の観点から顔の部分（眼，鼻，口，耳）から全体，さらにその構造，表情に至るまで検討した．体表の形状としては，最も直接的に影響を与える運動器系，すなわち骨格系と筋系が主に取り扱われる．人体の外見から推し量れる基準は古くから研究され，また実践されたが，それを内面から解剖的手法によって把握しようとするようになったのは，美術家たちにも医学に立脚した解剖学的知識が高まったイタリア・ルネサンス以降である．その後も発展し，人体や動物の解剖学において骨格，筋肉，腱，体表などの構造やその関連，または動作や運動によるその変化など，美術制作に関係ある事項を扱う学問分野を美術解剖学と呼ぶようになった．

美術解剖学は，その本来の目的から，体表の形状に最も直接的に影響を与える運動器系，すなわち骨格系と筋系が主に取り扱われるが，その他に，循環器系は皮静脈が皮下に観察されることから，その走行が取り上げられる[2)]．いわゆる内臓は通常は扱われないし，皮下脂肪を含む結合組織も，取り上げられることは少ない．

12. 審美歯学・矯正歯学の意味と美への貢献度

人とのコミュニケーションが最も大切な現代社会において，美しい口元や素敵な笑顔は，快適な社会生活を営むうえで大切な要素である．審美歯科には，快適な食事（良い噛み合わせ），楽しいお喋り（正確な発音）と爽快な口（清潔な歯と歯ぐき）を目標とする機能的な側面と，明るい笑顔（美しい歯並び），こぼれる白い歯（美しい歯と歯並び）ときれいな口元（良い噛み合わせ）を目標とし，口の健康と心身の健康美を増進している[1,2]．

顔の対称性は，いわゆる美しい顔を規定する三大要件，黄金比，対称性，そして平均顔のうちの一つである．ここで取り上げたいのは，このような静的な美顔ではなく，対称性をもった動的な美顔である．人間は，誰しも心の底からの喜び，満足，笑い，驚愕，号泣，敬意などを表出するときに，顔の表情が左右対称となる．この場合，体全体としても対称性のある姿となる．宗教的な礼拝のときの姿が一例であろう．一方，意識的あるいはある種の目的をもったときの笑い，ごまかし，偽り，無理な笑いなどの顔表現は，左右非対称である．矯正歯科治療では，微笑みの顔に左右対称性をもたせるし，そのときに見える歯が健康的な白であれば，他人を嬉しくさせる効果もあり，良い環境が伝染する．

審美歯科の具体的内容は，歯列矯正，ホワイトニング，クリーニング，オールセラミック，ハイブリッドセラミック，ラミネートベニア，ダイレクトボンディング，ポーセレンインレー，カンタリング（審美的輪郭形成），その他の特殊材質による人工歯などがある．このうち，ホワイトニングとクリーニングは，およそ6カ月ごとに実施されるので，歯科予防の観点からも最近特に推奨されている分野である．ホワイトニングには，歯を削るなど傷をつけることがなく，歯の色合い自体の明度